

2011年11月18日（金）に大学図書館ホールで、第20回大学図書館学術資料講演会を開催し、日本カレンダー暦文化振興協会理事長・国立民族学博物館教授中牧弘允氏に、「カレンダーから世界を見る」と題してご講演いただいた。また、それに関連して2011年10月28日（金）から11月22日（火）まで西宮上ヶ原キャンパス大学図書館において、「暦と文化を考える」と題して図書館所蔵の『暦』関連の図書“Systema cosmicum”などの特別展示を行い、あわせて「カレンダーから世界を見る」と題して図書館エントランスに、関連の図書の展示を行った。

【特別展示】

関西学院大学図書館が所蔵する『暦』関連の図書や古文書には、ガリレオ・ガリレイが17世紀に出版した“Systema cosmicum”〔図1〕がある。わが国の暦は中国から朝鮮半島を通じて伝わった、7世紀（690年）の唐の暦法から始まり、江戸時代の17世紀（1686年）に初の自前の暦法「貞享暦」が作られている。以後改暦を重ね、19世紀（1872年、明治5年）に現在使用している太陽暦への改暦と続く。今回の特別展示では、ガリレオ・ガリレイが宗教裁判に巻き込まれる原因となった「天文対話」のラテン語版“Systema cosmicum”をはじめ、18世紀では『立表測景暦日諺解』（1789年）〔図2〕、『和蘭天説』（1795年）〔図3〕、19世紀では『氣海觀瀾廣義』（1851年）〔図4〕、『会津暦』（1860年）〔図5〕、『京暦』（1864年）〔図6〕、『大小暦』（1879年）〔図7〕、また、アメリカの天文学書の翻訳である『星學圖説』（1871年）（上巻・下巻）〔図8〕、西洋の天文学および事情を見聞した内容を書いた『天學雜記』（江戸後期）〔図9〕、『太昇古暦傳成文』（江戸後期）〔図10〕や大坂（大阪）で質屋を手広く営んでいた樺原家が書き残した日記で、太陰暦から太陽暦への転換の様子が書かれた『攝津国大坂三郷樺原家文書』（明治初期）〔図11〕など、20世紀に入っては、キリストの生涯に行われた人類救済の事業を記念するための祭式を1年間に配分した典礼暦であるカトリック教会暦『吉利支丹暦』（図12）などの展示を行った。



特別展示：貴重図書室



特別展示：図書館エントランス



学術資料講演会チラシ



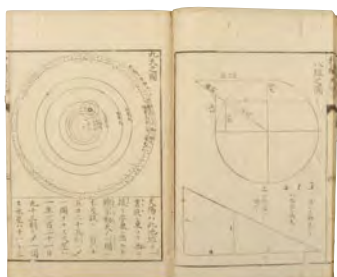
〔図1〕ガリレオ・ガリレイ



〔図1〕“Systema cosmicum”



〔図2〕立表測景曆日諺解



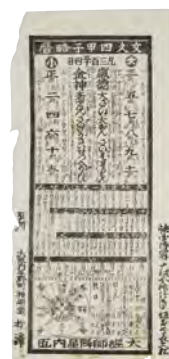
〔図3〕和蘭天説



〔図4〕氣海觀瀾廣義



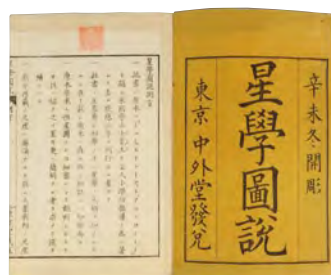
〔図5〕会津曆



〔図6〕京曆



〔図7〕大小曆



〔図8〕星學圖説



〔図9〕天學雜記



〔図10〕太界古曆傳成文



〔図11〕攝津国大坂三郷樺原家文書



〔図12〕吉利支丹曆